

僕は　すぐ次の手を打ち、
すぐに　加地に　紙を戻す。

一方、加地は　頭をひねくり時間をかけて
次ぎの手を考えている。

そこで、上野が
「おい、おれも挑戦だ。」
と　暇そうにしている僕に
別の紙を差し出す。

「ああ、いいよ、何人でも来い！」
と僕はその挑戦を受けた。

そしたら、前、後ろ、右、左の四人から
挑戦を受けてしまった。

それでも　僕は余裕で　授業も聞いていた。

生物の染色体の話して、男と女の違いの説明だった。

放課後、掃除と昼食が済んで、
一時十五分のバスに乗れるかどうか心配であったが
「まあ、一応。」と　足を運んだ。

道を歩いていると、昨日と同じ、
僕に視界を　バスが　横切る。

「大変だ。」と走ったが、乗れず。